

「殿と我らの栄達のために、奉行衆は邪魔である。まず正木大膳を除く」

糟谷石見守が進言した。

山之城に居座る正木通綱の存在は、彼個人にとつても、一々目障りだった。

「左衛門佐殿も除くべきである」

と進言したのは、宮本城将の鎌田源六だ。里見氏の実力者である実堯を排除しなければ、御傍衆は既得権を保てない。

中里源太左衛門はかつて鎌倉を焼き討ちしたときの実例を挙げ、海賊衆を籠絡している正木通綱・里見実堯が謀叛を企てていると捏造するべしと説いた。

「それならば、大義名分がなりたつ」

福原丹後守が頷いた。

「もつと、大義名分はないか？」

どうせなら、大罪に貶めるべきと、本間八右衛門はほくそ笑んだ。

久留里城には実堯の子・義堯がいる。

「これも生かしておけぬ。でつち上げるべし」

烏山左近大夫時貞が嘯いた。

さればと、小倉民部定光が提言した。

「殿を排斥し家督を奪わんと為す大罪というのはどうか？」

つまり、実堯はゆくゆく義堯を里見の後継者と据えるために、義豊を亡きものにせんと企んでいるというものだ。

勝手なもので、こういう建前は、みるみると膨らむものである。

「馬鹿なことを考えたものよ。もう、止めるがよい」

中里備中入道正端だけが、冷静な見方で、このような暴拳を諫言した。

「殿の志す（一統）のためには、いつかは除くべき二人である」

糟谷石見守が息巻いた。

「そなたたちは、（一統）という意味を知って、こういうことをやりたいのか？」

「あの二人を排除するためなら、理由はあとからどういっても云える」

「承伏しかねる。除くは二人に非ず、殿の抱く無謀な夢の側でござる」

中里備中入道正端は、毅然と、暴拳を慎むべきと訴えた。

「儂は先代より仕えし里見の傍系。このような暴拳を見過ごしては、先代に顔向けできぬ」

騒ぎが静まったのは、そこに義豊が現れたからであった。

「入道こそ、観念せよ。いつかはこうしなければ収まらないことだ」

義豊は彼らの暴拳を黙認し、後押しさえする考えを固めていた。そのためにひとつだけ、猶豫を示した。

「皆より先に、正木大膳は在地豪族として最初に（一統）を認めるべし。所領をすべて儂に差し出し、儂が改めて認可する。収穫はすべて儂に差し出し、六割を褒賞として返還。このことに同意せぬ場合は討取り、軍勢を差し向けて一族を根絶やす。その所領はそっくり里見に収め、討手で功ある者に恩賞として与えるだろう」

一同は静まり返った。（一統）とは、そのようなことなのか？よく理解できないまま、それでも従うことが、御傍衆の道であった。

それでも反対する中里備中入道正端に、義豊は

「座敷牢へ」

と命じた。

かくして義豊を中心とした御傍衆を核とする家臣団が一致団結を誓い、それに害なす者たちの排斥が画策された。

まず正木通綱を稲村城に呼び寄せて詰問、その結果次第で聞討ちする。

通綱が（一統）に応じれば、あとから招いた実堯を討たせる。応じなければ、共々討つ。実堯を討つと同時に、久留里へ軍勢を差し向け、義堯を討ち果たし後顧の憂いを取り除く。

「正木大膳を討つたら、山之城へは？」

糟谷石見守が身を乗り出した。

「そなたが参れ」

「はっ！」

この決定は、失敗の許されぬものだ。
いまは北条外交を成功させねばならない。御
傍衆の密謀はその後のことである。

天文元年三月。

再び北条から鶴岡八幡宮勸請の使者が訪れた。
義豊は対応の一切を実堯に託し、その裏で、
へ一統へへの野望を着々と練り上げていった。
十
十
十

相剋のはじまり (5)

夢酔 藤山